



みんなで作る  
イエナプランの輪  
De kring 《デ・クリング》

一般社団法人日本イエナプラン教育協会 オランダ支部 会報誌  
vol.2 2018年5月号



とある町外れの、栽培中のチューリップ畑。  
誰もいなくて、じっくり観ることが出来ました。  
“花の絨毯”とはまさにこのこと！  
一見の価値あります。 (川崎)

哲学的オランダライフエッセイ

(武田 昌子)

2018年2月某日、“未来”を語る哲学者としてオランダ国内外で活躍しているルード・フェルテナー氏の講演を聞きに行く機会に恵まれた。

“これからの10年間で、世界が大きく変わると思う方は、手をあげてみてください。”

フェルテナー氏が聴衆に投げかけたこの質問に、会場内の10%程度の人が挙手しただろうか。私も、まあいろいろと理由はあるが、挙手はしなかった。でも、講演開始後すぐに、これが彼が私たちに伝えたいメッセージなのだとわかった。「この先10~20年以内に世界に大きな変化が訪れる。」彼は、これまでの歴史や現在起きている技術革新の動向などを読み取り分析した上で、そう確信しているのだ。

続いて、フェルテナー氏は、エネルギー問題、技術革新の問題（人工知能や、人口IQチップ）などを取り上げた。彼は、決して新しいテクノロジーを敵対視しているわけではない。たとえ脳内にIQ増強チップを埋め込んで知能を高めたとしても、それは、あなたの人格や社会性やアイデンティティには何ら影響をもたらさない。なぜなら、「テクノロジーには、倫理というものがないのですから。問題なのは、技術ではないのです。」と力説する。技術は倫理を持たない。では、我々は一体どうやって我々の人間性（Humanity）を守っていけばよいのか？そこで、彼は教育の大切さに触れる。人間を人間たらしめることができる教育、そして、それに関わる教育者たちの重要性。そして、いまの教育を批判して、こう言う。「児童虐待まがいの現在の教育は今すぐやめるべきだ」と。大げさな表現だろうか？しかも、これは、世間では教育先進国と言われている国、オランダに住む彼が、自分の国の教育を批判して放った言葉なのだ。

数十年後には、大学を出たばかりの優秀なエリート達ですらその4分の1がまともな職にありつけないだろう、と言われるこの時代。今後は、働き方も生き方も大きく変化するであろう社会に対応できるような人間を育てるには、そして、育つには、一体どんな教育が必要なのか。大きな変革が起ころうとしている未来に向けて必要なのは、子供のクリエイティビティを伸ばせるような、新しい教育なのだ、と彼は言う。そう我々に訴えかける彼の背後には、「Stop stealing dreams!（子供達の夢を奪わないでください!）」というメッセージがスクリーンに映し出されていた。

そして、さらに興味深かったのは、「人間の意識にも大きな変化が訪れる」、と言う彼の主張だ。古代ギリシャに端を発する西洋文明が、ソクラテスの時代から2000年以上にも渡って取り組んできた「自我（エゴ）の確立」。西洋文明の、西洋哲学の要といってもよいこのコンセプトを、今、我々は、手放す時期にきているのだとフェルテナー氏は言う。そして、世界はこの先「エゴ/個人」の世界から、「相互依存（mutual dependence）」の世界へ移行していくだろう。それによって、「収入（個人の利益）を追いかけるのではなく、正しいこと（社会の利益）を追い求める」への意識の変換が必要になると言う。「社会にとって、自分がどんな意義を果たせるのか？」が、未来における大事なテーマになる。私の、そして、あなたにとっての、この世界において果たせる意義とは一体なんだろうか？これからはばらばらはこの問題に心を奪われることになりそうだ。

フェルテナー氏は、自らのことを「リアリスト」と称して、更には「リアリストなんていうのは、自分がペシミストだと気づいていないペシミストのことかもしれないけど」と自嘲までしていたが、とんでもない。彼ほどポジティブに、真正面から未来を見据えている人はいないだろう。

ルード・フェルテナー公式サイト；<https://www.ruudveltenaar.nl/>

\*アイントホーフェンで行われた「TEDx」における、フェルテナー氏のスピーチも、YouTubeなどで検索して視聴できます。

(写真：<https://www.ruudveltenaar.nl/media/fotos/>)

## = 学 校 訪 問 レ ポ ー ト =

in フェーンダム 2018. 4. 12

(牧野 恵)

川崎さんと共に、3カ月の研修でお世話になった先生を頼り、フェーンダムにあるイエナプラン学校、イン・デ・マネ (In De Manne) に行きました。私が今回見学させてもらったのは、3つあるミドルクラス (小学校で言う1, 2, 3年生グループ) のうちの1つ。私たちが学校に来たのはちょうど午前中の学習を終え、外で子ども達が遊んでいるところでした。校長代理の先生に紹介されたのは若い男性の先生。この先生は今年から働き始めたという、笑顔が素敵などとてもさわやかな雰囲気の先生でした。

イエナプラン学校の見学では、いつもいつもたくさんの気付きや学びを得るのですが、すべてを書ききることはできないので今回の訪問での気付きを私目線ですが、2点紹介したいと思います。

1つ目は外遊びを終えて教室に戻った時の事。それぞれ本を読んでいると、アップークラスの背の高いやんちゃそうな男の子がクラスにやって来ました。初めは笑顔もなく先生のそばに寄ってきた彼に、なにかトラブルでも起こったのかと思っていましたが、しばらくするとミドルクラスの男の子と一緒に廊下の方へ出ていきました。何をしているのかと思い、私もついて見に行くと、廊下の隅に置かれた二人掛けの机に学校で取り組んでいる自由作文 (フレネからの影響を受けた作文) の装飾を一緒にしているところでした。ミドルクラスの男の子は魚の柄を入れたいようで、男の子が選んでプリントアウトしたと思われる紙をお兄さんがハサミで切り、ローラーを使って切り取った魚の形の紙の周りにローラーを当てました。魚の縁の形を出すのと、切り取った後の紙を使って魚本体の形を出すのと両方試して示し、ミドルクラスの男の子にどちらが良いか選ばせてあげていました。その光景はとても自然で、優しく、温かくて。学校の中の異年齢交流とは特別な時間に特別な意図をもたせるだけでなく、普段の遊びや学びで行うことにこそ意味があるのだと改めて感じる場面でした。こうやって年上のお兄さんに優しく接する経験を得た男の子はきっとまた自分が大きくなった時、同じように年下の子たちに接していくのだと思います。結局男の子は縁模様の方がよかったようで、お兄さんがさらに青と緑の2色を使った素敵な魚の形がテキスト上に表れたものを持って、男の子は嬉しそうに教室に帰って行きました。その様子を一部始終見ていたので、気付いた彼に「素敵なものができたね」と声を掛けると、嬉しそうにうなずき、ローラーを使って汚れてしまった両手を私に見せながらニコッと笑って手を洗いに教室に戻る姿は、とても印象的でした。



ローラーやスタンプ、作り方などが常設されたコーナー。ここからどんな作品が生まれるのかワクワクします。

2つ目はクラスで行っていた活動の場面でのことです。この日は2週間に1回の催しの日とのことで、クラスで取り組んでいるテーマについて学んだことを発表するための準備をしていました。個々での活動や発表グループは準備を終えてサークルに集まり、催しに出る数グループが30分ほどの時間でみんなの前で順番に発表し、先生や友達からの意見を聞いていました。その後、昼食と遊びの時間を経て、再び催しの時間まで発表準備の時間を行い、午前中と合わせてトータルで1時間半ほど。長い時間座っていることに疲れてきたのか、先生も子ども達もあくびが出てきます。ちなみに私も…。(日本なら先生があくびするなんて!と叱られそうな場面ですが、疲れてくると出るものは出てしまいますよね。)日本での授業中であれば、発表の為にセリフから立ち位置、マイクの持ち方まで完璧に仕上げるための練習を繰り返す様子に何の疑問も持たれないような場面だと思いますが、ここ



調べたことについてまとめた物を掲示。右奥は、クラスで出てきた問い。

はオランダイエナプラン学校。子どもの姿より催しの発表に目が向きすぎていないかな?と疑問がわいてきました。その後、子ども達が帰った後、先生に質問をする時間があり、その時初めて先生が教員養成学校を出て1年目の先生だったことが分かり、この様子にも納得。後に川崎さんと一緒に話をする中で、若い先生であればあるほど、子ども達の姿から活動を組み立てるよりも、活動そのものに目が向きがちになり、発表

の質を高めたいという教師の気持ちから子どもの姿が見えていなかったのかもしれないね、と振り返りました。ここでは、気になった点を書きましたが、質問に丁寧に、そして快く答えてくれたこの若い先生は仕事をとても楽しんでいる様子でした。話をしている最中も、ほかの先生たちの笑い声が聞こえてきて学校や先生の雰囲気がとても良いのだ、ということも話してくれました。

そんな話を聞きながら、そして自分の教員時代の姿も思い出しながら、(といってもそんなに経験があるわけではありませんが、この先生よりは先輩だったので。笑)若い先生の姿はオランダでも日本でも同じだけど、その先生を支える環境は日本とオランダで大きな違いがあるのだと感じざるを得ません。勤務時間に余裕があり、ベテランの先生とコーヒーを片手に談笑しながら、焦らずリラックスした雰囲気の中で先生が学び、成長できるオランダの学校環境と、多忙感から他の先生へ相談もできず一人で抱え込みがちになり、時には指導という名の叱責で失敗の許されない雰囲気の中かで成長させようとする日本の学校環境。(決してすべての学校がこのようであるとは思っていませんが。)子どもも先生も、ともに成長していくために日本ができることはたくさんある、と感じた訪問でした。

## 次男が幼稚園に行き始めての雑感

(川崎 知子)

5月に4歳になる次男が3月初旬から、幼稚園に行き始めました。プレイグループと呼ばれる、未就学児教育機関です。2歳半になると、週に2回、8時半～11時半までの3時間行ける仕組みだそうです。次男の場合、オランダ語が出来ない子ということでさらに2回プラスして週に4回行けることになりました。町の小学校に併設されていることが多く、全部で10箇所くらいの施設の中から、空きのある施設に入るといった仕組みのようです。4歳になると基本的には小学校へ行くので、空きが出るのです。

さて、次男は最初の1週間はまったく泣かず、何が起きているのか分かっていない様子でした。(笑) 部屋に入ると、目新しいおもちゃがたくさん並んでいて、朝からよく遊んでいました。

2週目は、とにかく私を引き留め、大泣きでした。それでも、0歳から日本の保育園で鍛えられていたからか、私がいなくなるとすぐに泣き止んでたくさん遊んでいる様子でした。

3週目からは、私もさらっと置いてくるようにしたり、夫が送って行ったり、いろいろ試して泣かずにお別れができるようになっていきます。「さらっと」し過ぎて、「ママ、1～2分は一緒に遊んであげて、それからバイバイするといいわよ。」と先生に言われました。(笑) 実際、他のお母さんたちも椅子に座って一緒に遊んでいる姿をよく見ます。絵の具などの大人の人出が必要な作業をお母さんたちがちょっと手伝ってから帰るという場面もありました。

先生は、たぶん主担任がいて、副担任が3人程います。主担任の先生は毎日、副担任の先生は日替わりなのではないかと思うのですが、丸々1週間主担任がいない週もありました。病気だったのか、旅行だったのかは分かりません。エプロンとかはせず、ジーパンだったり、チノパンだ



たり、カジュアルな格好です。大人にも子どもにも、同じように話しかけているように見受けられます。息子は、びっくりするほど先生たちに慣れて、よく日本語で話しかけているようです。(笑)

月ごとにテーマを決めて遊び  
の中で学んでいます。5月から「わー  
お！暑い！」というテーマになり、部  
屋にテントが設置されました！

周りの子どもたちは、とても落ち着いています。次男は5月には学校に行く年齢なので周りはみんな年下だと思うのですが、みんながとても落ち着いています。異年齢であること、週に2回×3時間という短時間であること、親の仕事のための保育ではなく、学校に行く前の練習という目的が明確であることが理由ではないかと思います。しかも、4月などの年度初めに一齐に入園するのではなく、2歳半になった子から順番に入園してくるので、「全員が慣れていない状態」にはなりません。(親の仕事のための保育園もチャイルドケアとしてありますが、ワークシェアリングで男女ともにパートタイムが8割と言われているオランダでは、毎日チャイルドケアに通う子は少ないそうです。実際、息子のクラスでも11時半に父や祖父母が迎えに来ている家庭も多いです。祖父母が子育てを手伝うと助成金も出るらしいです。)さらに、「躾」ではなく、「遊び」が中心です。集団生活の練習ではあるけれども、親の私にも、特に「入園前のルール」は告げられていません。「10時からフルーツタイムだから、フルーツを持ってきてね。」くらいでしょうか。

フルーツの話で印象的なのは、次男の大好きなぶどうを持って行った日のこと。「先生がナイフで半分に切ってくれたんだよ。」と言うので、先生に聞いてみたら、「大きいから喉につかえないか心配だったので。」とのこと。きめ細やか！夫は「もうぶどうは持って行かない方がいいんじゃないの?」と言っていました。次男はナイフで切ってもらうことに特別感を感じてしまったらしく、ぶどうが一番良いそうで、様子を見ながら持って行っています。

毎日、迎えに行くと、輪になって話をしたり、歌ったり、手遊びをしているようです。次男は、一緒に楽しそうに手遊びをしていることもあれば、他の場所で遊んでいることもあります。輪にいないので探していると「あの棚の後ろで遊んでいるわよ。」ということも。

4歳の誕生日まであと1ヶ月わずか。ちょうど折り返し地点くらいでしょうか。すでに寂しいです。ちなみに、最後に代金の話ですが、契約書が郵送で届き、1時間7€と明記され計算されているのですが「町からの寄付」が€149で、「親からの寄付」は月€9だけ。子どものために税金を使ってくれています。



お昼に迎えに行くと、園庭の滑り台で遊んだり、花を摘んだりしてから、一緒に兄の学校へ向かうのが日課になっています。

# オランダ教育ニュース

(山地 芽衣)

## De Telegraaf

今回は、“De Telegraaf (デ・テレグラフ)”という新聞からのニュースをお届けします。

本文中の(※)は担当者によるものです。

### 子どもたち 外で授業

二〇一八年四月十日(火)

七時二十分更新

アムステルダムー二千三百校以上の子どもたちは、今週火曜日、教室を出て外の空気を吸いながら授業を受ける。これは、『全国外で授業の日』(※1)に開催される。この『全国外で授業の日』は、ヤンチエ・ベートン(※2)と、自然教育と持続性のための機関(※3)によって企画されたものである。

このような形で開催されたのは今年で三年目となり、参加校は依然として増え続けている。初年は三百校が参加したが、昨年は千七百校であった。

全国のスタートを切ることとなったのは、アムステルダムス・リヴィーレンビュールトにある、とある小学校。おそらく、映画『メース・ケース』(※4)の中の校長ドレウスとして子どもたちに知られているであろう、サンヌ・ワリス・デ・フリースがそこで屋外授業を行う。

多くの人が思うかもしれないが、参加校は都会に位置する学校だけではない。まさに、ゼーランドやフローニンゲンのような州においても、数多くの学校が応募したと、当団体の担当者は話した。

### 日光と新鮮な空気

「子どもたちにとって外にすることはいいことだということは、一般的に知られています。外で授業をすることによって、子どもたちは自然の日光と新鮮な外気にふられる。このことが、疲労軽減、気分改善に貢献し、また、子どもたちの学習能力へのポジティブな影響を持ち得るのです。」このようにこの団体は自身のウェブサイトですべて述べている。

担当者は、かけ算学習について例をあげている。「子どもたちが例えば縄跳びもしながらとなれば、よりうまくいくだろう。」子どもたちはさらに、特徴や名称を学んでいる最中の図形を探しに外へ出たり、あるいは、校庭で課題として与えられた物事を探して英単語を学んだりする。

## ----- ニュース担当から -----

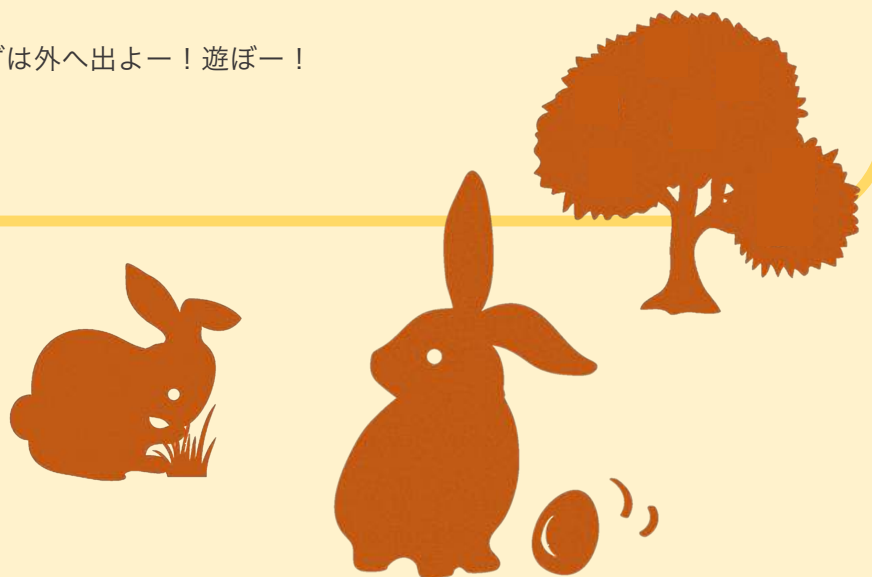
この記事を読んで、みなさんは何を思うでしょうか？記事の中に、“子どもたちにとって外にいることはいいことだということは、一般的に知られています”とありますが、私もたしかにぼんやりといいだろうとは思いました。でも、具体的にどのようなことで“いい”のでしょうか？さらに、かけ算の学習時に例えば縄跳びをしながらならなおいいだろう、という話。私は読んだときに、「かけ算と縄跳び？ん？ん？ん？」と首をかなり傾げました。

後になって、他のニュースや動画、当イベントのウェブサイトなどで実際の様子をさらに調べてみました。そしてそこで、はっとして、開いた口がしばらく塞げなかったのは、「遊びの中に学びがある」ということ。「学ぶ＝効率のよい知識の習得」が、未だなお普通の間接的なものとして私の中に完全に残っていたのです。遊ぶことと学ぶことは深く強いつながりがあるということは、幾度と耳にし目にし感じてきていたはずなのに、頭だけでも理解していたはずが、実際は理解している“つもり”だったのです。

私自身、遊びがまったく足りていないようです…！かけ算と縄跳びの組合せによる効能などを、ソファにただ座って小さなパソコン画面を何度も睨み直しマジメに考えるよりも、自然や外にあるものが見えて聞こえて肌で感じられ、どこまでも体を自由に伸ばせる場所に出る方が、心で発見するもっと大きな学びを経験できるに違いありません。

まあつべこべ言わず考えず、まずは外へ出よー！遊ぼー！

ところで…



〈会報誌 De kring タイトルの由来〉

De はオランダ語の冠詞、kring は輪（サークル）の意味です。イエナプランの大切にしている活動の1つ、‘サークル対話’に由来しています。



## 本記事

website 'De Telegraaf' より 'Kinderen krijgen buiten les'

<https://www.telegraaf.nl/nieuws/1894729/kinderen-krijgen-buiten-les>

### ※1 『全国 外で授業の日』

… 適切な教材を用いた外での学習によって、子どもたちは楽々としかも楽しみながら、発見したり探求したり、学ぶことができると主催団体は考えている。参加校には外での学習に活用できるセットが無料で配布される。今回の参加校数はオランダを中心に 2428 校であった。ベルギーやドイツ、スウェーデンなどの欧州だけでなく、イスラエル、南アフリカ、アメリカなどの学校も参加した。

( 参照 : website 'DE NATIONALE BUITENLESDAG' <https://www.buitenlesdag.nl> )

### ※2 ヤンチェ・ベートン

… ちょうど 50 年前に設立となった、子どもと遊びを守るために活動をしている団体。「決して遊びをやめないで！」がこの団体のメッセージ。

( 参照 : website 'JANTJE BETON STOP NOOIT MET SPELEN!' <https://jantjebeton.nl> )

### ※3 自然教育と持続性のための機関

… 自然と健康・子ども・生活圏・再生の 4 つのテーマに基づいて、授業やプロジェクトを行い、自然のよさや重要性をあらゆる世代に伝えている。

( 参照 : website 'ivn natuur educatie' <https://www.ivn.nl> )

### ※4 映画『メース・ケース』

… 小学校を舞台にした、産休代替教員としてクラス担任となった実習生メース先生の、子ども向けコメディ映画。本が原作となっている。オランダ語では、「Mees Kees」、『ケース先生』という意味。

( 参照 : website 'ploegsma kinder- & jeugdboeken' <https://www.ploegsma.nl/thema/mees-kees/> )

### ★おまけ

『全国 外で授業の日』の実際の様子が子どもニュース ( NOS Jeugdjournaal ) の HP で見ることができます。ぜひご覧ください！

website 'NOS Jeugdjournaal' より 'Heb jij vandaag ook buiten les?'

<https://jeugdjournaal.nl/artikel/2226650-heb-jij-vandaag-ook-buiten-les.html>

他にも気になる方は、'de nationale buitenlesdag' をキーワードに検索してみてくださいね。

次回のオランダ教育ニュースもお楽しみに！

# スクールリーダーシップ研修のご案内

教職員チームと学校共同体のファシリテーターとしての校長

アナザースカイとDVD「明日の学校に向かって」で一躍有名になったオランダ・バレンドレヒト市のドクター・スハエプマンズスクールで40年余りの校長経験を持つリン・ファンデンヒューヴェル先生による「スクールリーダーシップ研修」を来たる9月5-7日に実施する運びとなりました。学校を作りたいとおられる方、新しい学校経営に関心をお持ちの方、どなたにも参加していただける、現地集合・個人参加型の研修です。



## 講師 リン・ファンデンヒューヴェル

オランダの学校が画一的なものから、個別の子どもの発達を保障するものへと変換していった1970年代に、なんと20歳台で校長となる。

以後、イエナプラン教育のペーターゼンや最近展開されている様々な学校改革・組織変革の理論を取り入れて、40年以上の校長経験を積む。

オランダ・イエナプラン教育協会ペーターセン賞受賞。

教育監督局から「優秀校」に選ばれたオランダ・バレンドレヒト市のイエナプランスクール、ドクター・スハエプマンズスクールの校長。

現在は、若い教員たちに向けたイエナプラン教育研修・カトリック教育協会スクールリーダーシップや秀才児指導法の研修等の講師としても活躍中。

オランダの学校の校長は、学校で働く職員のリーダーとして、職員たちの力が最大限に発揮されるように職員の仕事をファシリテートするとともに、職員たちがチームとなるよう組織を運営し、さらには、生徒と保護者が安心して学校に関われる学校共同体の建設者・維持者であることが求められる存在です。新しい時代に向け、これまで、教育行政の末端の管理者として働いてきた日本の校長のあり方を見直す良い機会になると思います。

実施期間：2018年9月5-7日

参加資格：新しい学校作りに関心のある人（学歴・年齢・資格は問いません）

参加費：一人：780ユーロ（締め切り後、海外送金していただくか、研修の初日に現金でお支払いください）

（参加費には、研修講師への謝礼・同行コーディネーター通訳料、研修室貸室料、学校視察の謝礼、研修期間中の昼食費が含まれています。オランダまでの往復渡航費・宿泊費・期間中の朝食および夕食費・オランダ国内での移動にかかる交通費・海外旅行保険加入料は含みませんのでご注意ください）

実施人数：最低10人で実施、最大人数15人

- 研修には、全行程、リヒテルズ直子が通訳とコーディネーションを行いますので、オランダ語や英語ができなくても日本語だけで参加していただけます。
- 3日間の研修は、ロッテルダム市内の会場で行います（2日目に訪問する学校があるバレンドレヒト市はロッテルダムから電車またはメトロですぐです）。
- 宿泊先は、3日間朝9時から通えるところにご用意ください。



翌週のオランダ教育視察（詳細：<http://naokonet.com/page-1534764>）と組み合わせてのご参加も可能です。ふるってご参加ください。

## Dr. Schaepmanschool: onze Bronnen

### 研修内容

#### 9月5日水曜(1日目)

午前 9時-12時

<研修者同士が知り合いになるためのアクティビティ>

午後 13時-16時

<国際的視野からのオランダの教育の位置付け>

<オランダの教育監督の視点から>

<ピーター・センゲとマイケル・フランに学ぶ(1)>

#### 9月6日木曜(2日目)

午前

バレンドレヒト市の Dr.スハエプマン小学校の学校視察

午後 13時-17時

<学校視察の振り返り>(1時間)

<ピーター・センゲとマイケル・フランに学ぶ(2)>

#### 9月7日金曜(3日目)

午前 9時-12時

<ピーター・センゲとマイケル・フランに学ぶ(3)>

午後 13時-16時

<サバイバル・キット>

<秀逸なスクールリーダーになるための9原則>

<クリエイティビティ>

詳しくはホームページ [https://peraichi.com/landing\\_pages/view/schoolleadership](https://peraichi.com/landing_pages/view/schoolleadership) をご覧ください。

発行元：一般社団法人日本イエナプラン教育協会 オランダ支部

編集：一般社団法人日本イエナプラン教育協会 オランダ支部

E-mail：oranda@japanjenaplan.org